

腰椎変性すべり症

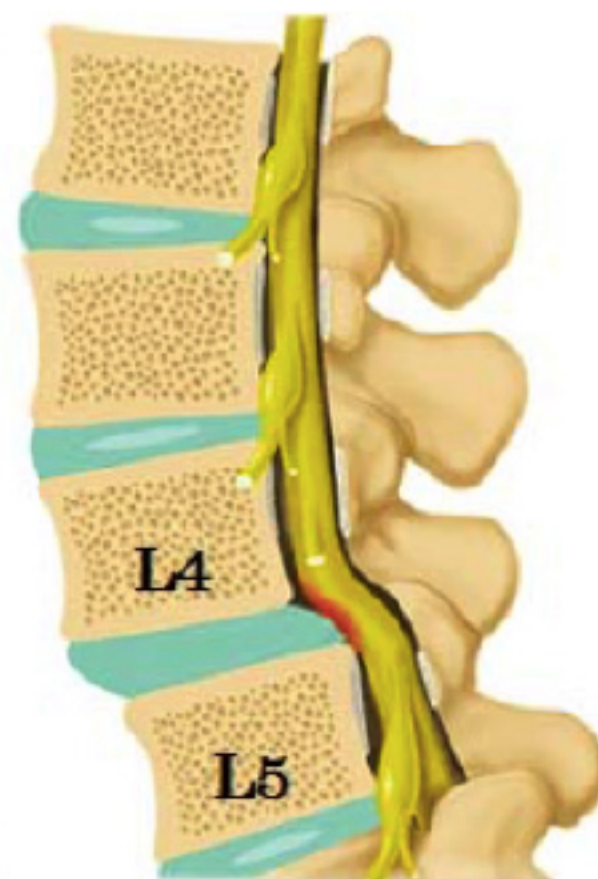
変性すべり症は、腰の骨（腰椎）が前後にずれてしまう病気で、中年以降の女性に好発し、第4番目の腰椎によく認められます。原因は明らかではありませんが、多くは加齢とともに腰椎の椎間板や関節・靭帯がゆるみ、腰椎が不安定性（ぐらつき）をともなつてずれるようになり、脊柱管（神経の通り道）が狭窄することで神経が圧迫されて、腰痛や下肢の痛み・しびれ感が生じます。進行とともに症状は変化します。初めは腰痛が主体ですが、進行すると神経の圧迫による間欠跛行（かんけつはこう/長い距離を歩くと痛み・しびれ感が強くなり、しゃがみこむと症状が軽減する）を認めたり、さらに進行すると安静時にも下肢の痛みやしびれ感が出現するようになります。治療は保存療法が原則です。腰痛が強い場合は、コルセットを装用し日常生活で腰に負担のかかる動作を避けることが重要です。鎮痛剤などを内服し、痛みが軽減してきたら腰部のストレッチや筋力訓練をおこないます。下肢の疼痛やしびれ感が強い場合、これらの保存療法で改善の得られない症例では除圧術や脊椎固定術などの手術が必要となることがあります。適切な治療が行われれば、治療後の経過は比較的良好ですので、早めに脊椎脊髄病の専門医の診察をおすすめします。



すべりのない腰椎



第4腰椎(L4)が
第5腰椎(L5)に比較
して前方に移動してい
る(すべっている)



(長屋郁郎監修:整形外科疾患
病態説明アトラスより引用)